

景観分析における資料としての写真の可能性

藤永 豪

1 はじめに

「景観」とは地表に刻み込まれた人間活動の痕跡であり、現在も個人あるいは社会全体の動きを反映しながら形作られ、変化し続けている。神奈川大学 21 世紀 COE プログラムでは、この「景観」をひとつのキーワードとし、その分析をとおして景観の中に見え隠れする人々の生活や営み、意思、思いを読み解こうと試みてきた。この研究遂行にあたり、貴重な資料となっているのが、神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵する、昭和 10 年代に澁澤敬三らが国内外の民俗や生活を撮影・記録した写真、いわゆる「澁澤写真」である。

「澁澤写真」の中に現れる事象は、ひとや動物、道具、家屋、集落、耕地、植生、地形、はてはむらびとの行為、しぐさといった生活・文化・風土全般に関わるさまざまな要素から構成されており、これらの写真資料から当時の地域の様子や民俗を読み取ることができる。本報告では、この「澁澤写真」の考察のための準備段階として、写真資料を用いた景観分析の可能性について、発表者自らが撮影した写真や「澁澤写真」の一部を用いながら、若干の試論的考察を行ってみたい。

2 記録としての写真、資料としての写真

今日、フィールドにおいて写真を撮影しない地理学者や民俗学者は存在しないのではない。フィールドでの調査を終え、一つの成果をまとめる段階になって写真を眺めた時、あらためてその地域を確かめなおすこともしばしばである。あるいは他者にフィールドを提示する場合、写真はみる者に具体的なイメージを伝え地域を理解させる上で有効な手段となる。実際、地理学や民俗学関連の学術論文の中では写真が多用されるとともに、写真を用いて地域を記述した書籍が多数出版されている。この場合、写真には二つの意味合いが存在すると考えられる。一つはフィールドを一枚の紙片の中にとじ込め記憶を呼び戻し、景観を他者に説明するという「記録」としての枠組みである。もう一つは明確な対象を写真に撮り、その写真に写し出された景観を解釈するという行為の中に表れる「資料」としての写真である。勿論、これは撮影者の意図の下に切りとられた景観が前面に押し出されたものであり、その解釈は自己と他者両方に対する説明資料としての意味を持つものとなる。解釈の中に客観的事象と意味を捉え、写真資料の意義を見出している。例えば、写真 1 は「澁澤写真」の中の 1 枚で、奄美大島の住用村の海岸を撮影したものである。マングローブ以外に、電線と電柱が見える。昭和初期には、すでに離島である奄美にも電気が通じており、この写真は同地域における一種のイノベーションを表しているともいえる。このように写真は、その地域の様相を景観として切り取ってくれる至極便利な記録であり、資料となる。

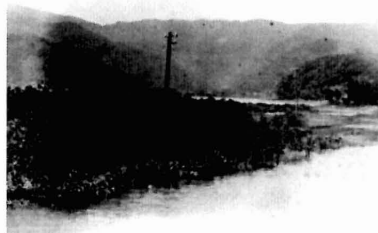


写真 1 奄美大島住用村城

(整理番号: SA580)

3 写真資料を扱う上での課題

しかしながら、その一方で、他者が撮影した写真の扱いと解釈が課題となる。撮影というただでさえ主観的な行為が他者によってなされた場合、その結果である写真を資料としてどのように扱えばよいのか。そこに危うさはないのか。この点に関して、菊地（2000）は1951年7月に発見された石川県鳳至郡柳田村の野本家におけるアエノコトの写真为例に、写真の解釈についての危険性を示唆している。この写真の中で展開されるアエノコトは厳しいメディア統制が行われた第二次世界大戦下に軍人の前で演じられたことや、行事を進行する人物が神道式神祭の作法を学んでおり、祝詞や御膳の様子にその影響が如実に表れていることから、「神道」の強い影響を受けた、本来の農耕儀礼としての姿とは異なることが明らかにされている。このような写真の「落とし穴」を避け、読み解くことが、単純でありながら、実に大きな課題となる。

4 写真の中の景観を読むということ

では、このような写真を景観分析にどのようにとり込めばよいのだろうか。矢野（2003）によれば、写真を記録と表現の手段として、積極的に調査に活用したのは地理学の分野だという。矢野は石井（1988）や田中（1935）を例に、地誌作成のために写真が多用されてきた流れと動向について言及している。特に田中の著書『地学写真』の中での写真の撮影と利用について、「道路網、水系、耕作系等が表現された地域全体」と「家屋のタイプ」や「生業」、「人間の風貌」などに関する写真が複数まとめられており、いわば「村落を被写体とした組写真」的な形式によって地域が表現されていることに注目している。さらにこの写真利用について、田中の言を借りつつ、「地理的景観の意味を正しく把握し、その観察・記録・観察地点の適切な取捨選択を行う」といった「学術的作為」が作用しており、これは「演出」とは異なる一つの表現方法であると述べている。

このような写真の利用法は、逆に写真を読み解くためのアプローチを示唆しているのではないか。田中や矢野のいう「学術的作為」が写真に働き、地域を正確に写しとろうとする視点が、すでに景観を構成する要素にそれぞれ向けられているのであれば、この視点を反対に他者が撮影した写真に当ててことで、景観を分析し、その意味するところを解明することにつながるかと考えるのである。極端に述べれば、あらかじめ注目すべき景観要素にあたりをつけ、その関連から「写真の外側にもつながる」景観の形成に思慮を及ぼしていくということである。もちろん、そのためには写真の中に現れたあらゆる景観構成要素に注目し（この点において、撮影者の意図するところとは別に偶然「写し取られた」要素も重要となろう（藤永ほか：2004））、それらの組み合わせや関わり方を読み解く力がまず必要となる。例えば、これを村落の景観ということで考えてみれば、田口（2006）が「民家の傍らに何気なく置かれている鍬や鋤、桶や樽、ザルやカゴ、瓦、屋根の角度、庭の取り方、地割り、視覚的に確認できるモノと生活の関わり方をシステムとしてとらえていることが重要である」と述べるように、写真の中の景観を読み解くためには、その背後にある人々の生活そのものとそこに見え隠れする彼らの意思を見抜かなければならない。しかも、「澁澤写真」をもとに景観の時系列変化を追う、となれば、各時代における人々を取り巻く社会経済環境や制度をも考えていかねばならない。

ちなみに、写真2は「澁澤写真」の中の1枚で、奄美大島名瀬の海岸における水葬の様子を撮影したものである。言うまでもなく、写真2の中心被写体はこの水葬という行事であるが、それも当時のこの地域の葬式という生活文化を知らなければ理解することはできない。また、集まった人々は、男女



写真2 奄美大島名瀬町海岸
(整理番号：SA575)

はもちろん老人、若者、子どもと様々であり、その服装も異なる。右奥には家屋が並び、煙突らしきものが見える。湾には漁船が浮かび、艀も写っている。さらに、奥の傾斜地には耕作地が広がる。右手前には石段も写っている。瞥見しただけでも、実に様々な要素が写されている。これらの要素を一つ一つ丹念に吟味し、当時の人々の生活に基づきながら相互に、しかも写真外の要素とも関連付けていくことによって、はじめてこの写真に表れた地域の様相が総合的に浮き彫りになってくるはずである。写真の中の耕作地ではどのような作物が栽培されているのか。土地割りはどうなっているのか。栽培方法はどのようなものか。商品作物であれば、どこに出荷されていくのか。水葬に集う人々の生活はこの農業あるいは漁業とどう結びついているのか。こういった次々と浮かび上がる疑問をもとに、写真の中の景観を形作る「目に見えない作用」を探り出すことこそ、写真の景観資料としての可能性を広げることにつながるのである。

【参考資料】

- 石井 實 1988. 『地理写真』 古今書院.
- 菊地 暁 2000. 柳田國男と民俗写真—あるアエノコト写真のアルケオロジー—. 日本民俗学 224 : 1-33.
- 田口洋美 2006. 映像民俗学の可能性と課題. 東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要 5 : 5-19.
- 田中 薫 1935. 『地学写真』 古今書院.
- 藤永 豪・八久保厚志・須山 聡 2004. 澁澤写真に写しとられた景観を読む—昭和初期の奄美大島の事例—. 日本地理学会発表要旨集 65 : 194.
- 矢野敬一 2003. 戦前における映像メディアと「郷土」の表象—熊谷元一『会地村 —農村の写真記録』と民俗学—. 日本民俗学 235 : 34-64.